大月人物伝 歴史探訪

早稲田の応援団で活躍した 井上　一光

井上一光は、明治二十一年三月十三日、広里村花咲二〇一番、父市朗、母みねの長男として生まれた。家は甲斐絹輸出を専門とする織物工場であった。父市朗は明治の初年、米国の織物カレッジに留学帰朝した洋行帰りであった。家には横浜からバイヤーのローセンソール氏がコック付きで一ヶ月も逗留、商品の買い付けに来たので、雇人も「アイアム、ア、ファーマー」などと、日常普段片言の英語をしゃべる家で育った。父市朗は流暢な英語で商談、日常生活も、近隣では見られない西洋風の食事や椅子での生活であった。家も横浜の商館を模した西洋建築で屋根に瓦の鯱を載せる風変りな建物であったので、自然と日本人離れをした人間に成長した。

幼少年期に門前の小僧で、父市朗とローセンソール氏の会話を聞き、いつの間にか、英語でおしゃべりが出来る少年になった。広里村小学校高等科を卒業、大月に設立された山梨県立中学校都留分校に入学した。同級生には、市の名誉市民小宮悦造博士等がいる。三年間、分校で学んだ後、一光は、本校にいかず、叔父道太郎のいる郁文館中学に編入、棚橋塾の塾生となった。棚橋塾では、叔父とは違いザックバランな性格で人気者となったが、遠慮の無い性格だったので、塾長には世話をかけた。明治三十九年、郁文館中学を卒業、早稲田大学の予科（現高等学院）に入り、商学部に進んだ。この頃、郷土では、東京電灯の駒橋発電所の工事が始まり、土木工事は、アメリカの工学博士タンナー技師、発電機の工事は、ドイツ・シーメンス会社のカール・ステルッツハンマー技師がいた。当時広里村には、外国語の解る人は、猿橋心月寺の住職とかで、一光は英語・ドイツ語も喋いたのは、一光の家だけで、今日、其の当時の伝票を見ると、パンは銀座の木村屋、ウイスキーは明治屋、横浜、東京から食材を購入していた。外国人技師の家族も一

れたので、通訳をした。また、父市朗も英語が喋れ、両技師とも花咲の井上家に遊びに来た。当時大月ではバターや、食パン・肉・ウイスキーなどを常食にして光の家と親交が深かった。

一光は早稲田大学に在学中は、日本橋芳町の中西儀兵衛商店に下宿した。古風なお店の生活で、周囲に迷惑をかけたようで、結局、早稲田弦巻町の下宿屋から大学に通った。当時早稲田には、阿部磯雄教授がアメリカから帰国、野球の監督をしていて、一光は先生に気に入られ応援団の団長となった。一光は阿部先生の鞄持ちとなって社会運動での活躍を夢見ていたが、古風な中西老人から危険人物視され、父市朗は中西氏の進言で、大学を退学させた。

一光は、渡米前徴兵検査を受け、一年志願兵として世田谷の輜重兵連隊に入隊した。兵役を終えるとカリフォルニア大学に入学、渡米後はロサンゼルスの日本人会の主事などして、自由気ままの生活を享受していた。語学に秀で五ヶ国語に通じ、アメリカでの生活が良くて永住を決めていたが、父市朗が、島田村の県議会議員上条修徳氏四女かつとの縁組を決め、大正十年八月帰国結婚、二男二女の家庭を築いた。帰国後は、ドイツピアノ線日本一手販売のボーレル商会の通訳をした。昭和八年、町制が敷かれ大月町となった。一光は自薦で町議会議員に立候補、都留館で青年を集め演説会を開いたが、民主的選挙がない時代故、周囲の圧力でつぶされた。また、富士登山の外人相手に案内をする英語のおっちゃんと、中学生などに人気があった。一光は棚橋塾の自由な教育に憧れその薫陶を受け、最も自由でフランクな人生を送った塾生の一人で、昭和十二年二月十四日、四十九歳で他界した。

参考文献

郁文館学園卒業名簿他

同窓　都留高の歩み

花咲山人夜話

執筆者　井上　文次郎